

## 修士学位請求論文要旨

筆者は中国で日本語を習ったときに、「日本人にほめられたら、『いいえ、そんなことはないです』と答えるといい」と日本語の先生に教えられた。中国における日本語教育では、「ほめ」には「否定」で返答すると教えることが多い。しかし、実際に日本へ留学しに来て、日本人の普段の生活を観察しながら、日本語母語話者が「ほめ」に対していつも「否定」で返答しているわけではないことに気づいた。さらに、ある日、大学で日本人の友人に「ワンピースがかわいいね」とほめられ、「実はもう一枚持ってるよ」と答えて、友人に驚かれた。友人の驚いた顔を見た筆者は、自分自身の返答が何か不適切であったため、友人に不快感を与えたと思った。そこで、日本語母語話者と中国語母語話者が相手にほめられたときに、どのように返答しているかに興味を持った。

本研究では、「ほめる」（以下、「ほめ」という言語行動を取り上げ、ほめ手側とほめの受け手側のいろいろな要因のうち、対人関係の親疎関係、上下関係、ほめの対象、の三つの要因に注目し、日本語母語話者と中国語母語話者の大学生のデータを用いて、両言語における「ほめ」に対する返答スタイルの共通点と相違点を明らかにすることを目的にする。本研究によって、両母語話者の異文化への理解の促進と、両母語話者の異文化間のコミュニケーションにおけるトラブル発生の低減、さらに、日本語教育と中国語教育における「ほめ」場面の教材開発に資することが期待できる。

第1章では、上記のように、本研究の研究背景・動機を紹介し、研究の目的及び意義を示した。

第2章では、まず、「ほめ」言語行動に関する先行研究を述べ、次に2種類の「ほめ」に対する返答（または応答）に関する先行研究、1つは、英語、日本語、中国語など、単一の言語における研究、もう1つは、日本語と韓国語、日本語とタイ語、日本語と中国語など、言語と言語の対照研究について詳しく述べた。これらの先行研究を概観し、「ほめ」に対する返答の研究に残された3つの課題を示した。

第3章では、本研究の研究課題を詳しく述べた。研究課題は以下のとおりである。

日本語母語話者と中国語母語話者の「ほめ」に対する返答スタイルは、

- (1) 親疎関係によってどのような違いがあるのか。
- (2) 上下関係によってどのような違いがあるのか。
- (3) ほめの対象によってどのような違いがあるのか。

第4章では、これまでの先行研究における「ほめ」及び「ほめ」に対する返答の定義を詳しく述べ、本研究における「ほめ」及び「ほめ」に対する返答の操作的定義を示した。

第5章では、本研究の研究課題を明らかにするために実施した予備調査について述べた。予備調査は、作成したアンケート調査票（自由記述式）が適切かどうか、また、このアンケート調査票によって、日本語母語話者（以下「日」と呼ぶ）と中国語母語話者（以下「中」と呼ぶ）の大学生から、「ほめ」に対する返答としてどんな回答が得られるのかを調べるため

に、2017年9月から11月にかけて、日本の明治大学の国際日本学部（48名）と中国の蘇州大学の大学生（20名）を対象に実施した。この予備調査を通して、「日」と「中」の大学生から得られたデータを分析したところ、研究課題を明らかにするデータが得られたため、アンケート調査票は適切であると判断した。

第6は、本調査の概要に関する内容である。アンケート調査票の作成、対人関係（親疎・上下関係）の設定、ほめの対象の設定、調査の対象者、調査の方法、調査の期間などの項目を詳しく示した。

第7章では、本調査のアンケート調査票（自由記述式）を用いて得られた「日」の1173例、「中」の1080例の返答について、先行研究の返答の分類を参考にしながら、修正を加え、本研究における「ほめ」に対する返答スタイルをまず、「単独返答スタイル」と「複合返答スタイル」の2つに分類し、それぞれの分類と下位分類を行った。そして、それぞれの定義を明確に示し、分類された返答スタイルについて用例を提示した。さらに得られた返答のデータの分類について、信頼性を高めるために、筆者のほかにも独立に、それぞれの母語話者（2名ずつ）にデータ分類の妥当性を確認してもらい、計3名の判定の一致の度合いを確認し、一致していない場合には協議して判定を定めた。

第8章では、本調査の分析結果を示しながら考察を行った。「言語行動」と「非言語行動」における「日」と「中」の特徴について、研究課題となった「親疎関係」、「上下関係」、「ほめの対象」の3つの観点から詳しく述べた。そして、どうしてこのような結果となったかという理由についても、筆者なりの意見を述べた。

第9章では、感動詞について詳しく述べた。これまでの先行研究では、主に「単独返答スタイル」と「複合返答スタイル」について述べたが、筆者が得られたデータを分析する際に「日」のデータには、「あ、ありがとうございます。」、「あっそうもないです!!」、「え〜ありがとうございます!」、「え、まじ?」、「えっ!! \_\_そう??」、「えー! \_\_ありがとうございます。」、「えー、全然だよ。」、「ええ〜? \_\_そうかなあ? \_\_全然だよ」という「あ系」、「え系」、「お系」のような感動詞が非常に多く現れ、「中」のデータには、「啊, 那不是理所当然的嘛! (あ、それは当然のことじゃないですか!)」、「啊! 今天很可爱? (あ! \_\_今日とても可愛い?)」、「哦, 是吗? 我也觉得蛮可爱的(あ、そうですか。私も可愛いと思います。)」という「啊(あ)」と「哦(お)」の感動詞が現れた。そこで、これらの感動詞に注目した。また、「親疎関係」、「上下関係」、「ほめの対象」の3つの観点から分析し、考察を行った。

第10章では、本研究の結論を述べた。10代~20代の大学生を調査対象者とした日本語母語話者と中国語母語話者の「ほめ」に対する返答においては、相手との「親疎関係」、「上下関係」、「ほめの対象」によって、主に以下の特徴が明らかになった。

まず、「日」と「中」は、相手にほめられた時にもっともよく用いている返答スタイルが「ありがとうございます/谢谢」であることが共通しているが、「日」は、「親疎関係」、「上下関係」、「ほめの対象」に影響されず、「Ⅰ同意系」>「Ⅲ打消し系」>「Ⅱ回避系」とい

う順番になっており、割合がそれほど変わらないのに対して、「中」は、「Ⅰ同意系」>「Ⅱ回避系」>「Ⅲ打消し系」>という順番になっているが、「親疎関係」、「上下関係」、「ほめの対象」によって割合がかなり異なっている。

また、「日」は、「働きかけあり」返答スタイルが2例現れのみであったのに対して、「中」は合計34例現れており、「日」に比べて、ほめられた時に、より相手に関与的に振る舞う傾向があり、親しい人により強くなる。

さらに、「中」の結果を見る限り、「上下関係」、「ほめの対象」による差より「親疎関係」による差の方が非常に大きい。「中」にとっては、「親疎関係」、「上下関係」、「ほめの対象」の3つの要因の中で「親疎関係」がもっとも大きく影響していると分かった。

以上の結果によると、筆者が日本人の友人に「ワンピースがかわいいね」とほめられた時に、「実はもう一枚もってるよ」と答えて、友人に驚かれた理由が分かった。日本語母語話者なら「持ち物」がかわいいとほめられた時に、「お気に入りなんです」か「ありがとうございます」と答えるのに、筆者は「もう一枚もってるよ」と、着ているワンピースについて自慢げに具体的な説明・情報提供を行うことで、より関与的に対応しようとしたため、このような異文化間コミュニケーションのギャップが起こったのではないかと思われる。今後、この結果を基に、日中母語話者の異文化間のコミュニケーションにおけるトラブル発生を低減、さらに、日本語教育と中国語教育における「ほめ」場面の教材開発に資することが期待できると考えられる。